



YUZ. MUR. 1972 →

海の史劇

後編

新潮社版

海の史劇^{うみ しげき} 後編

昭和四十七年十二月十五日 印刷
昭和四十七年十二月二十日 発行

六〇〇円

著者 吉村^{よしむら}昭^{あきら}

発行者 佐藤 亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)二二(大代)
〒三三・振替東京八〇八番

(乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

海
の
史
劇

後
編

哨戒艦『信濃丸』は必死になってロシア艦隊を監視し、午前四時四十五分には、

「敵針路東北東、対馬東水道ニ向ウモノノ如シ」

と打電、ついで、

「敵針路不動、対馬東水道ヲ指ス」

と、発信した。

ロシア艦隊は、『信濃丸』に気づかず北東に向って航進してゆく。

夜が、明けた。

『信濃丸』は、遠距離からひそかに平行して進んでいたが、午前五時二十分頃、ロシア艦隊の艦影は濃い霧の中に没して見失ってしまった。『信濃丸』は、全速力でロシア艦隊の艦影を求めて疾走し、午前六時〇五分再びその姿を発見することができた。

その頃、『信濃丸』の航路方向に白波をけたてて一隻の艦が先行していた。それは、三等巡洋艦『和泉』（二、九八七トン）であった。艦長石田一郎大佐は、「敵艦隊見ユ」の『信濃丸』からの

打電をとらえ午前六時四十五分、北緯三三度三〇分、東經一二八度五〇分の地点でロシア艦隊を発見、『信濃丸』と監視任務を交代した。

『和泉』の行動は、大胆だった。同艦は、ロシア艦隊を正確に観察するため七、〇〇〇メートルの距離まで接近した。

双眼鏡に眼を押しあてていた石田艦長は、

「敵艦隊発見。戦艦八隻、巡洋艦九隻、海防艦三隻及び仮装巡洋艦、工作船等若干、並びに駆逐艦数隻」

と打電させたが、石田はロシア艦隊の大規模な陣容に慄然としていた。

ロシア艦隊は戦艦八隻を主力に、万里の長城にも似た壮大な陣列で整然と航進している。百本にも及ぶ各艦の煙突から黒煙が吐かれていたが、長い航海中に焚火法に熟達したらしく少ない量しか流れ出ていない。

石田艦長はロシア旅順艦隊と遭遇したことがあるが、それとは比較にならぬ規模と威容にみちたロシア艦隊の姿に日本艦隊危うしという不安におそわれた。

ロシア艦隊に七、〇〇〇メートル近くまで接近した『和泉』は、十二インチ主砲を有するロシア新鋭戦艦の射程内にあった。またもしも高速巡洋艦が突進してくれば、速度もおそく備砲も貧弱な『和泉』は、たちまち撃沈されることはあきらかだった。しかし、石田艦長は、ロシア艦隊の動きをとらえているのは『和泉』一艦だけであり、撃沈されることを恐れずにあくまでもまわりついてゆかねばならぬと判断していた。

霧は、幾分うすらぎはじめた。

その頃までロシア艦隊は、日本軍艦間で交信される電信が急増したことを知っていたが、依然

として日本艦艇には発見されていないと確信していた。むろん夜明け寸前に『信濃丸』によって視認され、その緊急報が東郷司令長官のもとにつたえられて日本艦隊がすでに出撃していることなど予想すらしていなかった。

ただ『信濃丸』は、病院船『オリョール』によって目撃されていたが、同船のシチュエルバチェフ大尉は『信濃丸』について、

「午前五時頃、右方ノ霧ノ中ヨリ艦隊ヲ追尾シテ次第ニ接近スル商船現ワル。同船ハワレラト同航シタガ、数分後右方ニ転舵シテ霧ノ中ニ没ス。同船ノ国籍ハ不明。ソノ速力ハ約六ノット」と、旗艦に報告したにとどまった。つまりロシア艦隊は、『信濃丸』を哨戒中の仮装巡洋艦ではなくただの商船と思いこんでいたのだ。

しかし、『信濃丸』とは異なつて『和泉』はロシア艦隊側から日本軍艦であることが確認されていた。

霧に見えがくれるので初めのうちはよくわからなかったが、霧のきれ間からさしこんだ陽光にその艦体が明るく浮び上った。二本煙突、二本マストの艦型から、ただちにそれが日本の三等巡洋艦『和泉』であることが認められていた。

右翼列に縦陣をとつて航進中の諸艦の巨砲は、一斉に『和泉』に向けられていた。しかし、射程内にあるといつても距離は遠くその上霧も立ちこめているので、砲撃しても命中する確率は少ないと推定された。

ロシア艦隊にとつて三等巡洋艦『和泉』は、本国を出航以来七カ月目に初めて眼にする日本軍艦だった。しかも、同艦が偵察の任務をもっていることはあきらかで、七、〇〇〇メートルの距離で追尾してくる。ロシア艦隊の乗組員たちは、黒煙をなびかせながら進んでいる『和泉』の姿

を苛立った眼でみつめていた。

すでに各艦では非常ラッパが甲高く鳴り、艦隊は二列縦陣をとってその中央に特務船と二隻の病院船を包みこむように進んでいる。

ロシア艦隊司令部内では、巡洋艦を派遣して『和泉』を撃沈すべしという意見がたかまった。『オレーグ』『スヴェトラナ』の二快速巡洋艦を急派すれば、『和泉』をとらえて撃沈することは容易だった。

しかし、ロジエストヴェンスキー司令長官は、巡洋艦に『和泉』追撃の命を下さなかった。『和泉』は霧につつまれて航行している。その後方の霧の中には、有力な日本艦隊がひそんでいる可能性もある。もしも巡洋艦を『和泉』に向ければ、『和泉』は霧の中へ逃走するだろう。そして、それを追う巡洋艦は、霧中にひそむ日本艦隊に包囲されて撃沈の憂き目にあうかも知れない。ロジエストヴェンスキー司令長官の眼には、ただ一艦で航行している『和泉』が囧のように映じたのだ。

そのようなロジエストヴェンスキー司令長官の誤った判断によって『和泉』は攻撃されることもなく、ロシア艦隊の針路、陣列等を詳細に連合艦隊司令部に打電しつづけていた。

東郷大将指揮の連合艦隊主力は、朝鮮沿岸をはなれて全速力で南下していた。

主力艦隊以外には、対馬の尾崎湾方面に第三艦隊司令官片岡七郎中将指揮の哨戒艦隊が、また出羽重遠中将指揮の第三戦隊が五島列島白瀬の北西方にあった。そして、片岡艦隊と出羽戦隊は、『信濃丸』の「敵艦見ユ」の報と同時にロシア艦隊をもとめて緊急出動していた。

まず片岡艦隊では、午前五時四十四分、東郷正路少将が三等巡洋艦『須磨』『千代田』と八隻の水雷艇をしたがえて出撃、ついで片岡司令長官も二等巡洋艦『敵島』『鎮遠』『松島』『橋立』、

通報艦『八重山』（二、六〇九トン）をひきいて出動した。その際水雷艇隊は尾崎湾に待機させる計画であったが艇員の出撃要望が強く同行させることに決定し、百トン未満のものをふくめた水雷艇十八隻が巡洋艦にむらがるようにして南下していた。

午前九時五十五分、片岡艦隊は対馬の神崎南東十二キロの海上に達し、南方の水平線上を航進中のロシア艦隊を発見した。が、海上は波が高く水雷艇は激浪に翻弄されて航進不可能の状態になっていた。そのため片岡は、通報艦『八重山』を伴わせて水雷艇群を対馬の神崎方面に退避させた。

片岡第三艦隊司令長官は、第五戦隊の旗艦である二等巡洋艦『敷島』（四、二一〇トン）に坐乗『鎮遠』（七、六七〇トン）『松島』（四、二一〇トン）『橋立』（四、二一〇トン）をひきいてロシア艦隊の左前方八、〇〇〇メートルの位置に進出した。同艦隊に課せられた任務は哨戒で、その位置からロシア艦隊の監視につとめた。

また第三戦隊司令官出羽重遠中将は、巡洋艦『笠置』に将旗をかかげ『千歳』『音羽』『新高』をひきいて行動を開始していた。まず同戦隊は、午前五時五十分ロシア艦隊の病院船一隻を発見、遠く黒煙が十数条あがっているのを確認した。が、霧にさまたげられてたちまち艦影を見失ってしまった。

出羽戦隊は、霧の中を高速を利用してさがしまわったが発見できず、ようやく午前七時頃『和泉』から発信された電信をとらえ、敵艦隊が北方にあることを知った。

出羽は、四隻の巡洋艦をひきいて北上、午前十時三十分頃、ようやく対馬の神崎南方二十五キロの海域で再び霧の中に淡くかすむロシア艦隊を発見した。

出羽戦隊は、ロシア艦隊の左方約九、〇〇〇メートルの位置に進出、その針路、陣形等を東郷

連合艦隊司令長官に打電した。これによってロシア艦隊は、三等巡洋艦『和泉』について片岡艦

隊、出羽戦隊に遠く包囲されて監視を受けることになったのだ。

ロシア艦隊の乗組員は、それら日本軍艦の追尾に苛立っていた。日本艦艇は、射程距離ぎりぎりの海上を追ってくる。

ロシア艦隊の各艦の砲員たちは、

「射たせて下さい。射たせて下さい」

と、士官に必死になって頼みこんだ。が、旗艦『クニヤージ・スヴォーロフ』のマストには「砲撃セヨ」の信号旗はあがらない。各艦の士官たちは、はやる砲員たちを制止するのにつとめた。

午前十一時四十分頃、出羽戦隊の『笠置』『千歳』『音羽』『新高』の四巡洋艦が八、〇〇〇メートルの距離まで近づいてきた。

それを見た戦艦『オリョール』では忍耐の限度も越え、旗艦の命令も待たず突然砲撃を命じた。その発射が口火となって、戦艦とそれにつづく各艦の砲口は一斉に火をふいた。

出羽戦隊は、たちまち十二インチ、六インチ砲弾につつまれた。その射撃は、日本海軍の予測を完全に裏切ったものだった。ロシア艦隊の砲撃術は拙劣だといわれていたが、旗艦『笠置』の舷側には数条の水柱が上るなどその射撃はきわめて正確だった。

『笠置』以下各艦は砲口をひらいて応戦したが、射程内にとどまれば全滅するおそれがあるので、出羽司令官は各艦に対し射程外にのがれることを命じた。『笠置』『千歳』『音羽』『新高』の四巡洋艦は、砲撃しながら全速力で射程外に身をさけた。

出羽戦隊にむけられたロシア艦隊の初砲撃は、日本海軍に激しい脅威をあたえ、ロシア艦隊強しの印象を濃くした。辛うじてロシア艦隊の射程外にのがれた出羽戦隊の四巡洋艦は、隊列をと

とのえると九、〇〇〇メートルの射程距離外にはなれて監視行動をつづけた。

砲撃を中止したロシア艦隊の旗艦『クニャージ・スヴォーロフ』のマストに、

「兵員交代デ昼食シテヨロシ」

の信号旗があがった。日本の主力艦隊との決戦をひかえて、早目に食事をとらせようとしたのだ。その日は、たまたまロシア皇帝ニコライ二世の戴冠式記念日にあたっていた。乗組員たちは、決戦日が祝日であることを縁起がよいと口々に言い合ったが、決戦直前なので式は簡単におこなわれただけであった。各艦では総員勝利をちかう祈りが神にささげられ、士官室では一同起立して祝盃をあげた。

艦長たちは、士官たちにロジエストヴェンスキー司令長官からの祝辞を力強くつたえた。

「陛下の神聖な戴冠式記念日にあたる本日、われらは死を賭して祖国のために戦おうとしている。神よ、われらの熱烈な祖国愛をお認め下され、われらに輝しき勝利をあたえたまえ！ 皇帝陛下、皇后陛下、ウラー！」

艦長の声に士官たちは、ウラー、ウラーと叫び、それは艦内や甲板上にいる兵たちにもつたわり大歓声となってひろがっていった。

食事をあわただしくすませた乗組員たちは、それぞれの部署にもどった。かれらは、ロシア艦隊の砲撃によって出羽戦隊の四巡洋艦が狼狽したように逃げ去ったことを痛快がっていた。

「日本人め、思い知ったか」

「たかが東洋の猿どもだ。ひねりつぶしてやる」

士官も兵も、眼をいからせてののしっていた。

しかし、避退した出羽戦隊と片岡艦隊は、霧の中を見えがくれしながらつきまってくる。殊

に三等巡洋艦『和泉』は、ロシア艦隊の左舷方向にただ一艦で依然として平行に航進をつづけていた。

ロシア艦隊は、九州と対馬の間の海峡に接近してゆく。

その頃、ロシア艦隊の航進を知らぬ日本の商船が九州方面から進んでくるのがしばしば目撃された。『和泉』はただちに艦首をめがけ、商船に接近し、

「ロシア艦隊前方ニアリ。反転セヨ」

と、信号旗をかかげた。これらの商船は、驚いたように急速に反転すると九州方面に去っていった。

そんなことが何度かくり返された後、門司方面から一隻の運送船が航進してくるのが目撃された。それは、陸軍運送船『鹿兒島丸』で、陸軍将兵を満載して朝鮮へむかう途中であった。

『鹿兒島丸』はロシア艦隊にむかつて一直線に突き進んでゆく。『和泉』は、全速力で同船にむかって進みながら危険を警告する信号旗をあげたが、『鹿兒島丸』は反転する気配もみせない。

『鹿兒島丸』の甲板上には、陸軍将兵がひしめき合いながら、前方を航行中のロシア艦隊に眼を向けている。そして、船長以下船員も、大きな城の群れのように黒煙をあげて進むロシア艦隊に眼をうばわれ、『和泉』のマストにかかげられた信号旗には気づいていないようだった。

『和泉』艦長石田一郎大佐は、『鹿兒島丸』の船長をはじめ陸軍将兵たちが、ロシア艦隊を日本艦隊と思いこんでいるらしいことに気づいた。『鹿兒島丸』は、転針もせず速力をゆるめもせず、ロシア艦隊にむかつて突き進んでゆく。そのまま航進してゆけば、無防備の『鹿兒島丸』はたちまちロシア艦隊の砲撃をうけて撃沈され、多数の陸軍将兵たちの生命も失われる。

石田艦長以下乗組員たちの顔から血の気が失せた。危険は、刻々とせまっている。石田は、航

海長に対しロシア艦隊に近づいてゆく『鹿兒島丸』に全速力で追いつかるよう命じた。そして、信号兵に手旗信号を送らせたが、『鹿兒島丸』は、依然として航進をやめようとしなない。

『和泉』の艦上は、騒然となった。信号兵は、しきりに反転するよう手旗をふる。石田艦長は、「警笛鳴ラセ」

と、ひきつれた声で命じた。

波浪を蹴散らして全速航進をつづける『和泉』から、鋭い警笛が連続的にふき上った。その音響に『鹿兒島丸』の甲板上にひしめき合う陸兵たちが、『和泉』に眼を向けた。それを見た『和泉』乗組員たちは、必死になって手をふり手旗信号を送った。が、期待に反して陸兵たちは、それを歓迎の挨拶と思ったらしく、嬉しそうに手をふりはじめた。

石田艦長は、狼狽した。『鹿兒島丸』は、ロシア艦隊の射程距離内に入ろうとしている。かれは、『和泉』をさらに『鹿兒島丸』すれすれに接近させると、拡声器を口に押しあてて、

「もどれ、引き返せ、前方の艦隊は、敵艦隊だ。味方ではない。引き返せ、引き返せ」と、叫んだ。

その時、『鹿兒島丸』甲板上の陸兵たちの間から、

「バンザイ、バンザイ」

の叫び声が上がった。かれらは、『和泉』が近々と接近したことに歓喜しているのだ。

石田は、

「引き返せ、敵艦隊だ」

と、絶叫をつづけた。

しかし、その声は陸兵たちのバンザイを唱和する声にかき消されてしまった。そして、陸兵た

ちは帽子をふり手をふって白い齒列をみせて微笑しながらバンザイ、バンザイを叫んでいる。

かれらは、ロシア艦隊を日本艦隊と信じて疑わなかった。洋上を長い陣列を組んで航行する艦隊の威容に、戦場へ輸送される途中の陸軍将兵たちは感動し、歓声をあげているのだ。

バンザイの声は、洋上を圧している。三等巡洋艦『和泉』の乗組員たちは、口々に、「引き返せ、敵艦隊だ」

と、叫びつづけた。

石田艦長は、再び艦の警笛を連続的に鳴らさせた。すでに『鹿兒島丸』は敵艦の射程距離内に入っていて、しかも一直線に敵艦隊にむかって突き進んでいる。

相つぐ鋭い警笛に、陸兵たちのバンザイの声もしずまった。石田は、この機をのがすまいとして、拡声器に口をあて、

「バカ者、前方にいる艦隊は敵だぞ。射程距離内に入っているのだ、引き返せ、引き返すのだ」と、思いきり大きな声で叫んだ。

連続的に鳴る警笛と拡声器で必死に叫ぶ石田大佐の姿に、ようやく異様な気配を察したのか、『鹿兒島丸』甲板上のどよめきもしずまった。石田は、叫んだ。

「貴船は、敵艦隊にむかって進んでいる。急速に博多方面へ引き返せ」

その声に、『鹿兒島丸』の甲板上にいた陸兵たちが、前方のロシア艦隊にあらためて眼を向けるのがみえ、その直後かれらの間に激しい混乱が起った。おびえたように、船内に走りこんでゆく者もみえた。

『鹿兒島丸』の船長も、『和泉』のマストにひるがえる警告信号によりやく気づいたらしく、船は舳を曲げて大きく反転した。そして、速力をあげると九州方面に引き返していった。

『和泉』の乗組員たちの間から、安堵の声がもれた。いつの間にか『和泉』は、敵の砲撃を浴びせかけられる位置に入りこんでいたので、石田艦長は急速反転を命じ、ロシア艦隊の射程距離外に撤退することができた。

ロシア艦隊は、右手に九州、左手に対馬をのぞみながら対馬水道に進入してゆく。その艦隊の右舷方向には、三等巡洋艦『和泉』が、左舷から前方には片岡艦隊の二等巡洋艦『敵島』『鎮遠』『松島』『橋立』、三等巡洋艦『須磨』『千代田』『秋津洲』と出羽戦隊の巡洋艦『笠置』『千歳』『音羽』『新高』が、それぞれロシア艦隊の射程距離外にあって、霧の中を見えがくれしながら追ってきていた。

対馬東水道に達したロシア艦隊は、針路を北二三度東に定め、ウラジオストック軍港に艦首を向けた。

ロジエストヴエンスキー司令長官は艦橋上から日本巡洋艦が北方に進むのを確認し、東郷の指揮する主力艦隊が北方から接近してくると予測した。

北方に東郷司令長官の指揮する日本主力艦隊が待ち伏せしていると判断したロジエストヴエンスキー司令長官は一行になって航進しているロシア艦隊の隊列を変えさせた。それは、東郷艦隊が二列縦陣をとって決戦をいどんでくるだろうと予測したからで、ロシア艦隊にも二列縦陣をとらせたのだ。

しかし、この陣列は戦闘体形として決して好ましいものではなかった。もしも日本艦隊が右舷方向にあらわれれば、右側に列をつくって進む艦が主として戦闘をおこなわねばならぬ。つまり二列縦陣は、戦闘力を半減しかねない危険があった。

ロシア艦隊は、十二ノットに速度をあげていた。各艦内の機関部では、逞しい体をした焚火兵

たちがスコップで石炭をすくっては必死になって石炭をカマの中に投げ込んでいる。すさまじい火熱と煙が室内に充滿し、その中でかれらは半裸の体を石炭の粉塵と汗につつまれながら石炭を投げこみつつづけていた。

その頃、東郷平八郎司令長官指揮の主力艦隊は朝鮮南岸の加徳水道を出撃後、決戦海面に急いでいた。海上の気象状況は、不良だった。空は晴れていたが、海上には霧が立ちこめていて視界は八、〇〇〇メートルから九、〇〇〇メートルまでしかひらけていない。それに西南西の風が強く、波浪は高かった。そのため各艦にはすさまじい高波が激突し、全艦隊は大きく揺れながら航進を つづけていた。

先頭には、連合艦隊旗艦『三笠』（一五、一四〇トン）が位置し、第一戦隊の戦艦『敷島』（一四、八五〇トン）『富士』（一二、五三三トン）『朝日』（一五、二〇〇トン）について装甲巡洋艦『春日』『日進』（いずれも七、七〇〇トン）が続航する。その後を第二艦隊司令長官上村彦之丞中将指揮の装甲巡洋艦『出雲』（九、七三三トン）『吾妻』（九、三二六トン）『常磐』（九、七〇〇トン）『八雲』（九、六九五トン）『浅間』（九、七〇〇トン）『磐手』（九、七七三トン）が行き、さらに巡洋艦『浪速』『高千穂』（いずれも三、六五〇トン）『対馬』（三、四二〇トン）『明石』（二、七五五トン）も続いていた。つまり戦艦四、装甲巡洋艦八、巡洋艦四の編成で、それに十七隻の駆逐艦（三〇〇トン内外）と十一隻の水雷艇（約一五〇トン）が魚の群れのようにむらがっていた。

その日本主力艦隊の隻数は四十四隻という数にのぼっていたが、そのうち二十八隻は四〇〇トン以下の駆逐艦、水雷艇で、全艦隊が一团となって航進するロシア艦隊とくらべるとはるかに見劣りするものであった。

激浪の中を艦隊は進んだが波浪による艦の動揺はさらにたかまり、各艦の舳は波間に沈み、そ